

Title	香川懸史蹟名勝天然紀念物調査報告第二(香川懸同調査會編)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.144(304)- 145(305)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0145</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れたのを記されたのではなく(一)、(二)、(三)の話はトメキチの傳承であり(四)から(九)に至る間はタウクノの傳承であり、

もなかつた星が一つ、淋しい、嬉しさうに輝いてゐるのが見え  
る。(大正十二、十二、十九 曾根研三識)

(十)はアカルバの物語なのである。是等大系の間に挿入されてゐる、類話、別傳、異傳等についても一々確實なる傳承者を擧げられてゐるのは著者が、白い雪に埋もれた北海道で寒氣と戦ひながら最後の勝利を得られた苦心努力を語るものである。其の内容の記述法は前記によりても知られるように、先づ、大系の話を書いて、その話に關する別傳、或は類話、或は又異傳等を列擧して其の比較研究に便ならしめ、それによつて私のような全然、無

### 伊豫史精義

景浦直孝著  
伊豫史籍刊行會發行

定見、無知識な者の頭にも春霞のように、ポンヤリと彼等の生活信仰をそうかしらんと想像させて頂く事が出来るのである。著者も又、そいふ心持で此の物語を譯されたのでなからうかと思はれるのは此の書の最後に「既に述べた數十篇の說話で見るやうに、アイヌラツクルに關する色々様々の傳へは、同一人の事功として、いくら神人の事だとしても、不可能であるほど多すぎる。また述べ方の上には、甲が乙と必ずしも何の交渉がない。それ故、各々の傳へを皆事實とするには、どうしてもアイヌラツクルを少くとも二人以上に了解しないでは出来ない」といふような比較研究のひらめきが見えるので分ると思ふ。著者は單に此の物語を述べられるのを目的とせず、其の物語からアイヌの生活、信仰等いろ／＼なものに觸れようさせられたのである。そして其の決心に背く事なく成功しておられるのが此の著述なのである、心なしか。雜司ヶ谷に眠つてゐるアイヌ乙女の嬉しさを示してゐるのであらうか、暗い寒い冬の夜に名も知らぬ、又、見た事

曩に愛媛縣史の編纂にたづさはり、現に伊豫史談會の幹部として知られる稚桃景浦直孝氏は過去十餘年間の研鑽の結晶たる伊豫史精義なる約千頁の著書を公にせられた。今其の書を一覽するに同國の有史以前より近代に至る迄の事實は網羅せられ、實に其の精義の名に背かず、學界有益の書たるは云ふまでも無い。

本書は緒論、有史以前、大和朝廷時代、律令撰定時代、奈良時代、平安時代、源平時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戰國時代、織豊時代、江戸時代、明治以後に大別し、更にこれを章節に分かつて記述せられ、其の緒論に於ては「郷土史の意義に就いて」「郷土史に對する主張」「郷土史研究に際しては左の諸點に注意すべし」の三説に就いて論述せられてゐる。猶卷末に「伊豫史研究重要史籍」が附せられ、これは伊豫に關する諸書の解題で參考となるどころが多い。この外追加補正、索引も添へられてゐる。本書の内容の詳細に就いては異日に譲り、今は單に本書の學界にあらはれたるを紹介し、謹んで本著者に敬意を表するものである。

(大正十四、四、一 武田勝藏)

### 香川縣史蹟名勝天然紀念物

#### 調査報告第二 (香川縣同調査會編)

本書は第一篇史蹟及名勝の部、第二篇天然紀念物の部の兩篇に

分かれて居る。次に第一篇に收める所のものを紹介する。

第一引田城址——大川郡に屬し、東讃唯一の要港たる引田港の東北にあつて、天成の要害をなし、頂上は南北東の三方に展開する。其城址は朝鮮式山城に屬するので、天智天皇の朝に唐新羅の來寇に對する國防として築かれた屋島城に策應すべき爲めに築城せられたものであらう。

第二城山城址——綾歌郡の北部に聳立する城山の上に存し、同じく朝鮮式山城にして、山頂の平坦部全部を以て城廓をなし、城門址、壘壁等現存し、又ホロソ石組石と呼ぶ築城關係のものも存して居る。本城は始め國造時代綾氏によつて築城せられたが、天智天皇の朝に唐新羅の侵襲に備へる爲め増せられたものであらふ。又管公の當國に國司であつた時この城山に雨を祈つたことは有名な話である。余昨秋南狩遺蹟調査の節この組石を見たが仲々大きなものであつた。

第三鹽飽島史蹟——仲多度津郡に屬し、備讃海峡の西部にある本島始め數島の合稱である。島は南北朝頃より内海に於ける倭寇の根據地となり、島民は操舟に熟練するので、秀吉の西國九州兩征伐には軍隊輸送の事に預り、其の爲め秀吉より天正十八年には全島物成一千二百五十石を船方六百五十人に與へられた。徳川幕府になつても同じく朱印を與へられ、殊に河村瑞賢の奥羽官米の廻遭の節には、其舟隻の完堅精好、島民の淳朴なる故に輸送に選ばれたのであつた。幕末には本島の泊浦笠島の兩所に幕府の貯炭所が設置せられ、又幕府軍艦の水夫には島民多く、殊に安政七年咸臨丸の米國渡航の乗組員中廿六人は當島の出身であつた。これ

等によつても島民の操舟の術に熟達して居つた事が推察せられる。全島には「人名」と稱する一階級のもの六百五十人があり、それより四人の年寄が選ばれて島治に當る。寛政年間には本島泊浦に勤番所を設置して全島の政所をなし、殊に同所に朱印書庫（方一間半）を建て、庫内に厨子があり、厨子の中に石櫃があり又石櫃の中に木箱があり、其の中に信長、秀吉、家康以下の朱印狀其他重要書類を入れてある箱が收めてあり、實に鄭重を極めたものである。これによつても當時、御朱印の如何に大切なるものであつたか窺はれる。

第四銅鐸——大正十二年四月十七日三豐郡一谷村夢畑より出土のものにつき詳述せられたものである。猶本縣には從來發見せられたものは既に十個に及ぶといふ。

次に第二篇天然記念物之部に於ては本縣の植物礦物廿一種につき其の種類、名稱、所有地、地目、所有者、形狀及現狀、沿革、保存管理等分つて詳記せられたものである。猶本書には鮮明な數十の寫眞、測定圖等を本文の適所に挿入してあつて甚だ便利である。

最後に本調査に主として努力せられた調査委員岡田唯吉、福家惣衛の兩氏に滿腔の敬意を表する。

（大正十三、十二、廿 武田勝藏）

能美郡民謡集（早川孝太郎編）  
郷土研究社發行

本書は爐邊叢書の一冊として最近にあらはれたものであつて、